

「わたしと、青年と、運転手さんと」

長崎県 富山麻衣子

ある雨の日のこと。私は西城山経由、下大橋行きバスに乗っていた。バスの中から、ふと窓の外を見た時、次のバス停に、見覚えのある一人の青年が立っているのに目がとまった。以前この青年が歩いているのを見たことがあったから、私には分かっていた。彼の身体には障害があるってこと。いつもは、元気な人が歩いても少し疲れるくらいの長い道のりを歩いている。不自由な手足を使って。その時、青年が必死に手を上げた。今日は雨が降っているからか、このバスに乗るようだ。この手足が不自由な青年が無事に乗れるだろうか、私はちょっと不安だった。だけど心配はいらなかった。バスの運転手さんが、「大丈夫。ゆっくりでいいからね。出口に近い所に座りなさい」と言って彼がバスに乗り座席に座るまでの長い時間、待っていてくれたのだ。座席に座った青年は、口を動かし何か言おうとしていた。運転手さんは、それを見届けた後、にっこりと微笑んだ。私は正直驚いた。こんな運転手さんもいるんだと。それから少し先まで行くと、彼は停車ボタンを押した。バス停につき、青年が立ち上がり、料金を払い終えるのを見届けると「ありがとう。ゆっくり降りていいんだよ」と言った。青年は口を動かして言った。「ありがとうございました。」はっきりとは言葉になっていなかったけど、きっと伝わっただろう。ドアが閉まる時、運転手さんが「またのご乗車お待ちしております」と言うと青年は、もう一度、「ありがとうございました」と言って深々とお辞儀をした。

私は青年と一緒に心の中で呟いた。

「ありがとう、運転手さん。」

ちゃんと、伝わったかな。